

〈東北・新潟の活性化応援プログラム〉 2017年助成団体活動成果レポート

助成団体

特定非営利
活動法人

がんばろう福島、農業者等の会

福島県二本松市

プロジェクト名

ふくしまの農家でエンジョイ！ 「里山テーマパーク」



■地域の紹介

二本松市は福島県中通りの北に位置し、「智恵子抄」に詠われた安達太良山と阿武隈川で知られています。二本松市は菊の城下町と称され、日本最大級の菊人形展「二本松の菊人形」が有名。日本酒づくりが主要産業の一つで、多くの酒造メーカーを抱えています。

■地域の課題

福島第一原子力発電所の事故の影響により、福島県の農家は、風評被害などの問題に直面しています。地域の実態を広く知ってもらうことが大きな課題となっています。

■当団体の紹介

福島県内の各農家が協力して、「スタディファーム(福島県の農業に関する学習および体験)」の中心的農園である「二本松農園」を、より楽しく交流が図れる場所にするために設備や機能の整備を推進。福島県の農業に対する一層の理解浸透と交流人口拡大を図っています。



■背景・目的は？

地域の課題を解決するためには、全国(あるいは世界中)の人々に福島農家を実際訪ねていただくことが効果的です。当NPOでは、震災後これらの受け皿として「スタディファーム」を行ってきましたが、これらのメニューをさらに充実し、より多くの方々に福島農家を訪ねてもらい、「顔の見える関係」を構築することにより、福島のマイナスイメージを徐々に払しょくしていく事が目的です。

■具体的な活動は？

より多くの方々に「スタディファーム」においでいただくため、大手旅行会社と提携し、「学びの旅」のメニューに入れていただきました。また、NPOの取り組みとして、「福島農家を訪ねるツアー」の実施、あるいは「大収穫祭」を毎年定期的に行うこととしました。この結果、スタディファームへの年間入込は、

(平成28年) 850人

(平成29年) 1400人

(平成30年) 1500人

と大幅に増加しました。特に参加者からは「こうして福島農家を訪ねてみると、放射能を取り巻く福島県農業の状況が手に取るように分かる。」との声が多く聞かれました。

このように、福島農家を知るためには「まずスタディファームへ」との流れが確実に構築されつつあります。



バスでの来訪



大収穫祭



稲刈り体験



スタディファーム来訪団体



国会議事堂内に店舗開設



企業内マルシェ



外国人も来訪



外国人団体来訪

■活動の成果は？

福島県の農業を取り巻く、いわゆる風評被害については、「正確な情報が伝わっていない」ということが主たる原因であると思われます。このような中、スタディファームを訪れることにより、正確な状況を肌で感じることができ、ここからの口コミにより、福島県の農業のイメージ回復に大きく貢献しているものと思われます。

具体的には、来訪者がその後、定期的に福島県産農産物を購入する例が多いほか、毎年、福島県を訪れる人も増えています。2019年(平成31年)4月から「国会議事堂」の中に福島県産農産物を直販する「店」の開設が実現しましたが、これも、スタディファームに来訪した元国会関係者の紹介によるものです。

当NPOは、「顔の見える関係に風評被害はなし！」をモットーとして活動していますが、まさに、スタディファームを中心としてこの考え方が実現しています。

スタディファームについては、集客のシステムであるため、現実的には、交流のためのメニュー整備、施設整備、備品・消耗品、パンフレット等を要しますが、これらの一部に本助成金を活用させていただいたことにより、当事業をスムーズに運営することができました。特に、来訪者と一緒に農園の中で食事をするのは、つながりをより強化しますが、本助成金の一部を、バーベキューのための設備、食事を作るための厨房（保健所の許可も取得）の施設の一部に使用させていただき大変助かりました。これにより、来訪者が、説明や農業体験だけでなく、食事もとれるようになったため、滞在時間（交流のための時間）が飛躍的に長くなりました。

団体からのコメント

農業生産法人を運営しながら、このような先を見据えた活動も行う必要があるため、やはり、これを継続的に実施していくための、財政面・人員面に課題があります。たとえば、「福島で農業をやってみたい」という都市部の若い人がいたとしても、現実的に、福島で農業だけで生活していけるのか？という課題に直面し、そこで夢が止まってしまうのです。福島の問題は、根本的に「日本の抱える農業の問題」でもあると思っています。農業従事者の高齢化が進んでいる中、高齢農業者の「技」をいかに継承していくか、農業者がいかに「生きがい」を持つことができるか、という課題をクリアするため、たとえば、スタディファームを軸として、高齢農業者、若手農業者(法人)、新規就農者、全国の消費者が集って交流できるシステムをつくっていきたいと思っています。

